

『教育学論集』第1集 目次

創刊にあたって	教育学専攻長 大戸安弘	1
I 論文		3
＜研究論文＞		
堀和郎・柳林信彦	学校支援の教育改革の規定要因に関する実証的研究 市町村教育委員会教育長に対する全国調査を基に	3
山内 芳文	大学の学問としての教育学 ライン、パウルゼン、トレルチの所論をめぐって	29
大間 敏行	江藤新平における「道学」論の形成基盤 佐賀藩時代の教育的背景を手がかりとして	51
林 佳翰	R. W. Paulの批判的思考理論の特質 民主的社会で求められる批判的思考者とその育成	71
山口 誓子	La « Communauté éducative » dans plusieurs mondes en France à travers le changement du concept de « la vie scolaire » (フランスの『教育共同体』における複合的次元の諸相 『学校生活』概念の変遷を通して)	89
＜研究ノート＞		
法澤 剛一	日本における高校生留学政策の展開と今後の課題 日本からの留学生派遣を中心として	107
II 博士学位論文概要 (平成14年度～16年度)		129
III 修士学位論文概要 (平成14年度～16年度)		157
IV 彙報		241
編集規程		242
執筆要領		244
編集後記		246

創刊にあたって

人間総合科学研究科

教育学専攻長 大戸 安弘

新世紀を迎えて5年を数えた。世紀末の時代に胎動を始めた東欧の大変革は、その後、多様な道筋で世界に波及し、在来政治・経済システムの根幹を大きく変えつつある。その影響は、なにごとにつけても変化への対応の遅れを指摘される日本の社会にも次第に波及しつつある。国境や境界を越え、世界的な規模で進行しつつある変化のただなかであって、日本の社会にも、日本の芸術・文化においても、良きにつけ悪しきにつけ、これまでとは異なる変化が現実のものとなりつつあることを、多くの人々は実感していることだろう。急速な変化に戸惑いつつも新たな現象に直面するなかで、大学にも変化の兆しが生じつつある。

大きく社会変動が進行する時代であって、筑波大学大学院博士課程の大幅な改組・再編がなされた。その結果として、2005年3月末を以て教育学研究科は30年の歩みに区切りをつけ、同年4月より人間総合科学研究科を構成する専攻へと全面的に移行することになる。このような状況のなかで、人間総合科学研究科教育学専攻は、教育学専攻所属教員と大学院生とが共同し、研究成果を世に問う機関誌として『教育学論集』を創刊する。

おそらく後世、この時代は歴史的な大変革期としてとらえられることになるのだろうが、そのような時代であることから、教育の本質、学問の自立、人間の尊厳は、ややもすると傲岸にして無定見な力によって損なわれる危険性もある。一方、変化に対して臆病であり、自己錬磨を怠り、旧態に安住し、変化を阻害しようとする動きもみ

られるのが常である。『教育学論集』創刊を具現化した力は、こうした混沌とした状況を突破し、困難な時代を切り開き、教育学研究の新たな地平へと到達しようと希求する人々の意志が結集したことによって生じた。

このような思いを共有することができるすべての人々に対して、『教育学論集』は門戸を開いている。空疎な権威主義や頹廃を打ち破り、先人が残した学問的遺産を批判的に継承しつつ、教育学研究の新世紀に向けて前進しようとする人々のための自由な研究交流の場として、『教育学論集』は歩みを始める。

『教育学論集』には、教育学専攻所属教員のみならず大学院生による論考が、多数寄せられることになる。それらの過半は習作期の論考であることはたしかだろうが、そこに将来の教育学研究を担うことを予感させる原石を見いだすことも困難ではないだろう。教育学的常識を覆すような、枠組みを再構成することに繋がるような、清新な論考が蓄積され、やがて教育学研究の新しい波が、学界に向けて発信されることを期待したい。